

臨床看護師における看護師の知の様相－3年目看護師の臨床看護実践における知の語り－

| | |
|-----|---|
| 著者 | 杉田 久子, 福井 純子, 西村 歌織, 唐津 ふさ |
| 雑誌名 | 北海道医療大学看護福祉学部学会誌 |
| 巻 | 14 |
| 号 | 1 |
| ページ | 37-42 |
| 発行年 | 2018-03-31 |
| URL | http://id.nii.ac.jp/1145/00064563/ |

〔研究報告〕

臨床看護実践における看護師の知の様相 — 3年目看護師の臨床看護実践における知の語り —

杉田 久子, 福井 純子, 西村 歌織, 唐津 ふさ

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

要旨

本研究は、3年目看護師が臨床看護実践の語りをどのように意味づけし、「知」を表現するのかについて「臨床看護実践を語る会」という実践共同体の語らいの場から検討した。研究参加者は3年目看護師4名（男性2名、女性2名）であった。

3年目看護師が語る知は、〔自分らしい看護の将来像をもつ〕と〔自分なりの倫理的価値観をもつ〕の2つの様相で表現され、14の概念カテゴリーから構成された。3年目看護師が語る知の様相は、理想とする看護の像が自分の中で腑に落ちて、明確で具体的な看護実践のビジョンとなり、失敗や後悔といった経験から学んだ本質的な目標ができて、より近づくための努力をすることであった。そこでは自分なりの倫理的な価値観と臨床現場で生じている価値観の間で、時に葛藤を覚えながらも、もっと善くするためにできることとして、自分らしい看護実践の模索と問い直しの倫理的な知について語られることが明らかとなった。

キーワード

3年目看護師, 臨床看護実践, 看護の知, 語り

I. はじめに

少子超高齢社会において、看護職には質の高い医療の提供が期待される中、臨床現場は在院日数の短縮とそれに伴う入退院数の増加、クリニカルパスの普及等といった高度化高速化の状況にある。臨床看護師はこうした状況に加え、新人看護職員の育成や様々な役割を抱え、多重の実務をこなす疲弊している現状があり、看護実践について語り深める機会は激減している。本研究は、「臨床看護実践を語る会」を主軸に、看護実践の知を「個人の知」にとどめず、実践共同体として共有化を図る「関係の知」を探り、語らいの場を通して、個人知の掘り起こしを期待するものである。

Carper (1978) は、個人知は真の自己というものを率直に表現するための土台であり、相互作用、関係性、浸透作用の要素が内包されていると示した。そのため個人知は、看護に重要な対人関係の中で養われ、高められ、共有し、体験できるものであると結論づけられる。またTanner (2000) は、学んだ知識と自分自身の経験とを関連づける臨床対話のために、自分の経験を語ることの重要性を強調し、とりわけ「語らい」という相互作用に期待を置く。自分の経験を語ることによって、その人自身は自己内省につながるが、聞い

ている看護師は、語る人の臨床状況を思い描くだけでなく、同時に自分の臨床を思い起こして重ね合わせていく作業をする。「臨床看護実践を語る会」というグループで語るスタイルをとることによって、話す人も聞く人も互いに啓発されて、この「語らい」の中で、個人知が「関係の知」として言語化されていくと期待される。

先行する研究（臨床看護実践における看護師の知の様相—2年目看護師の臨床看護実践における知の語り—、当学会誌収録）において、2年目看護師は、自己成長や達成感を感じつつ、理想とするあるべき姿に近づいていると感じる一方で、自分が思い描いていた理想の看護師像とのギャップも同時に感じていた。業務偏重になりがちで環境にのまれている状況から脱却し、患者と向き合う実践から学びを獲得し、その内省から課題を見だし、自ら看護実践の環境を作り出していくことのできる移行期にあった。そこにはエキスパート看護師の看護実践から学ぶ審美的な知についても語られた。

そこで本研究では、新人看護師から続く3年目看護師の看護実践の知の様相を見だし、看護基礎教育および臨床現場での継続教育におけるキャリア形成支援のための基礎資料を提供したい。

II. 研究目的

3年目看護師が臨床看護実践の語りをグループメンバーと共有することから、意味づけられた知の様相を

<連絡先>

杉田 久子

北海道医療大学看護福祉学部看護学科

E-mail: sugita@hoku-iryo-u.ac.jp

明らかにする。

なお、本研究における「知」とは、単にこれまで学んだことを個人の知識として表現するものを指すのではなく、仲間と共に、これまでに獲得した知識や技術を関係づけたり意味づけたりする「関係の知」を意味している。また、「知」の様相とは看護実践の語りを共有する交流を通して意味づけられた「知」のあり様をいう。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン

質的帰納的研究デザイン

2. データ収集期間

2014年11月～2015年2月

3. 研究方法

1) 研究参加者

急性期医療を提供するA市の地域中核病院に勤務する3年目看護師を対象に、継続して開催される「臨床看護実践を語る会」に参加の意思を示した4名。

2) データ収集方法

データは、陣田(2007)の文献を参照し、5つの基本ステージ(①想起, ②内省, ③焦点化, ④醸成, ⑤展開)を縦軸にとりながら、収集した。看護実践内容の自由記述の表現(①, ②)、「臨床看護実践を語る会」からのグループディスカッションの内容(③, ④)、および個人インタビューの内容(⑤)から得た。データ収集のステップの詳細と「臨床看護実践を語る会」の開催方法は、先行論文(臨床看護実践における看護師の知の様相—新人看護師の臨床看護実践における知の語り—, 当学会誌収録)を参照。

3) データ分析方法

収集したデータのうち、看護実践内容の自由記述については、グループディスカッションに参加するために語りの内容を想起することが主要な目的であるため、語った内容の裏付けとして用いる参照データとした。

逐語録とした音声データは、木下(2003)が提案した分析手法を参考として、質的帰納的に分析を行った。概念の生成法であるオープン・コーディング、概念の精緻化のための分析ワークシートの作成、およびカテゴリ生成を行った。詳細は、先行論文(臨床看護実践における看護師の知の様相—新人看護師の臨床看護実践における知の語り—, 当学会誌収録)を参照。

4. 倫理的配慮

本研究は、北海道医療大学看護福祉学部・看護福祉学研究科倫理委員会(承認番号:13N011008)および

協力施設の倫理審査の承認を得て実施した。

先行研究の参加者に対し、3年目看護師としての研究参加について改めて口頭と文書で研究内容を説明し、研究参加の同意と承諾を得た。研究参加は自由意思であること、インタビューの内容の音声録音の承諾、データの匿名化と研究以外での不使用、個人情報保護を保障すること、途中辞退でも不利益が生じないこと、データの管理保管を厳重にし、研究終了後に一定の期間をおいた後でデータを破棄することを保証した。

「臨床看護実践を語る会」は参加を強制するものではなく、継続参加は任意であり、途中辞退も妨げない。また、研究参加が職務遂行上の査定などに影響を与えないことを保証した。研究者はグループディスカッションの円滑な進行のためファシリテーターとして参加をするが、批判的態度やそのような印象を与えることのないよう配慮した。

Ⅳ. 結果

1. 「臨床看護実践を語る会」開催概要

研究に参加した3年目看護師は4名(男性2名, 女性2名)、23～25歳、内科病棟勤務1名, 救急部勤務1名, 手術室勤務2名であった。全員が看護専門学校を卒業後の就業であった。「臨床看護実践を語る会」は、就業2年7ヶ月目と3年目終了時の2回開催した。第1回のテーマは、「今伝えたい私の看護実践」で、参加者は3名であった。第2回のテーマは「3年目看護師として看護を語る～新人看護師からの歩みを振り返り将来ビジョンを語ろう～」で、参加者は4名であった。1回の開催時間は約75分、総計149分であった。

2. 3年目看護師の臨床看護実践における知の様相

3年目看護師が語る知には、〔自分らしい看護の将来像をもつ〕の語りと〔自分なりの倫理的価値観をもつ〕の語りの2つの様相が見いだされた。〔自分らしい看護の将来像をもつ〕は5つの概念カテゴリー、〔自分なりの倫理的価値観をもつ〕は7つの概念カテゴリーをそれぞれ内包しているが、これらの両方に属している理想となる看護実践が2つの概念カテゴリー(「プラスアルファのベストなケア」, 「チームの中で戦力になる」)で表現された。また、3年目看護師としての立場の変化や役割遂行にかかる4つの概念カテゴリーは、これらの知の様相に影響する基盤となる知として表現された(図1参照)。

以下に、概念カテゴリーの内容を語りの表現の一部(斜体)と共に示し、抽象度の高い順に、〔 〕, 「 」とする。

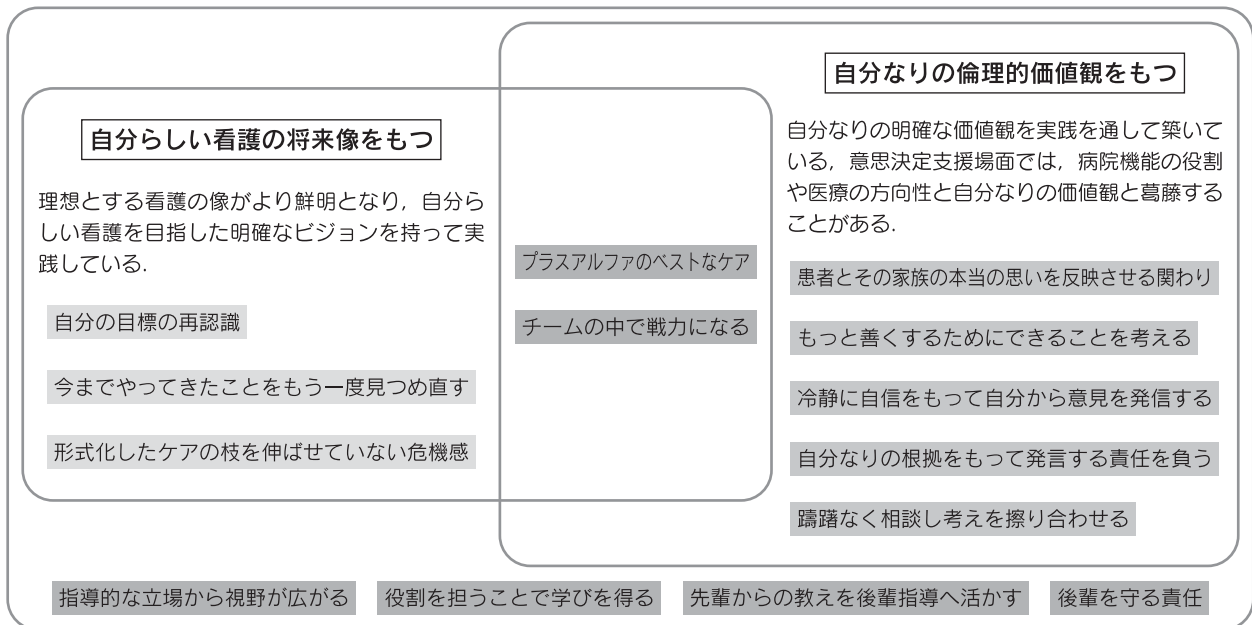


図1. 3年目看護師が語る知の様相

【自分らしい看護の将来像をもつ】の知の表現

理想とする看護の像がより鮮明となり、自分らしい看護を目指した明確なビジョンを持って実践していること。

病院で療養をする患者さんというのをしっかり学んで、その後、精神科とか診療所とかに行き、それぞれの人の生活背景とか生活にちょっと密着したところを見ていて、ゆくゆくは訪問看護とか在宅の方にいきたい。

【自分の目標の再認識】

「こうありたい」や「こうあるべき」実践の姿が確実なものとなり、経験から学んだ目標に少しでも近づきたいと再認識して努力すること。

自分の中では処置を安全にかか安楽にというのは当たり前なのかなというところもあって、(中略)(救急)搬入されてから、30分以内にできるだけ家族にお会いして、そしてご本人様に会っていただくことを目標にしているんですね。できる限り処置の間でも、ちょっとの間でも家族に会っていただいて、今の状態を見てもらって、一緒に臨んでもらえる体制をつくるのが、本当はいいことなのかなと再認識することができたんです。

【今までやってきたことをもう一度見つめ直す】

行っている実践に疑問を投げ、なぜ行っているのか、何のために行っているのか、どうすればいいのか、自分達は何ができるのかを考えること。

本当に忙しくて、処置に没頭していて、ふと患者さんのところに戻ったら患者さんが苦しっていて、自分は何を見ていたんだろう。患者さんのそのサインに何で気づけなかったんだろうということがあり

ます。そして、そういう時に自分は看護師だよな、自分は何を見ていたのだろうと振り返る。

【形式化したケアの枝を伸ばせていない危機感】

形式化・ルーティン化してしまい伸び悩んでいる。決まったことはできるが、その人の個別に合わせた必要としていることになかなか届いていないという危機感のこと。

形式化されちゃっていて、どんな患者さんにも同じ声掛けをするし、最低限見なきゃいけない観察点だったりとか、ケアの内容だったりとかいうのはもちろんあるんですけど、先輩が敷いてくれたこのルールがあって、その上をこういうふうにするんだよ、こういう観察点があるんだよ、というふうに教えてくれた、そこから何か枝を伸ばせていないなとちょっと思っています。

このように3年目看護師は、理想とする看護や目標が明確となったため、今一度、自分の行っていることの見直しから、看護を意味づけていこうとしていた。

【自分なりの倫理的価値観をもつ】の知の表現

自分なりの明確な価値観が実践を通して築かれている。意思決定支援の場面では、病院の役割や医療の方向性と自分なりの価値観との間で葛藤することがある。

この患者さんはこうした方がいいんじゃないかなとか、こうしてあげたいなということが出てきたからには、今のところじゃないなと思っていて、もうちょっと何か、落ち着いて一人一人と関わられるようなところに行きたい。

【患者とその家族の本当の思いを反映させる関わり】

医療に対して希望や意見を言えない人に正当な医療を提供できるように関わること。

信頼してというのだったらいいんですけど、あきらめてという方が時々あるので、そういう方の時に、どうすればもうちょっと自分の意見を引き出せるのかなとかいうのは悩みますね。

「もっと善くするためにできることを考える」

実践できるようになったことでも、十分でないことを後悔しレベルアップした実践への模索と改善を振り返ること。

対応はできるようになっているとは思うんですけども、本当に内容としてしっかりしているのかなと、もっと他にさらに善くできるんじゃないかなということもいつも浮かんできます。

「冷静に自信をもって自分から意見を発信する」

視野が広がり知識も増えて自信をもって自分なりのスタイルを形成し発言すること。

アセスメントがパッパッパッとできるようになったというのはちょっと思うかな。それと自分から発信できるようになりました。それは人間関係が構築されてきたというのもあるのかもしれないんですけど、何かおかしいと思ったり、これはまずいと思ったり、自分から声を掛けられるようにはなってきたかなと。

「自分なりの根拠をもって発言する責任を負う」

自分なりの明確な根拠のある考えを持ち、人任せにせず意見を発信する責任が求められてきたと自覚すること。

私の意見ひとつで変わるわけじゃないけど、自分の意見に根拠もそうだし、自分の考えをしっかり持って発言していかないといけないという責任感はずごく最近感じます。

「躊躇なく相談し考えを擦り合わせる」

相談したいことが明確になったので、自分の考えだけに頼るのではなく、他者からの意見や判断の正しさを確認すること。

できるだけ多く自分だけの目じゃなくて、他の人の目も借りながら、相談できない環境とかそういうことで困ったことはないですかね。

このように3年目看護師は、目指す看護の目標と現実の関わりとの間で葛藤をしているが、自分の意見に根拠を持ち、自分らしく善く行うことへの責任を負う覚悟を自覚していた。

〔自分らしい看護の将来像をもつ〕〔自分なりの倫理的価値観をもつ〕に共通する知の表現

「プラスアルファのベストなケア」

ケアの質を高めるために発展的で個別的なケアを経験と知識を活用して模索すること。

必要なケアを教えてもらった通りにももちろんするけど、じゃあ、もっとこういうこともできるんじゃないかなとか、この人だったらこういうふうにしたらいんじゃないかなという、できるかどうかは別と

して、そういう考え方も3年目になって少しできるようになってきたかなと思います。

「チームの中で戦力になる」

仕事を任せられると思ってもらえるように、そのための知識と行動力を日々の実践の中で培うようにすること。

3年目になったらある程度、戦力として働かなくてはいけなくなってくる。(中略)あ、この人なら任せられるとか、広くマルチに動けるような人になりたいと思う。

このように3年目看護師は、日々の実践の中でケアの質を高めるための努力をしていた。

3年目看護師としての立場の変化や役割遂行の知の表現

「指導的な立場から視野が広がる」

指導的な役割を担うことで、今まで気がつかなかったことに目が行き視野が広がること。

3年目になって、どっちかという見られる立場から見る立場になりつつある時期だと思うので、見る立場になってきたから、やっぱり後輩たちを見守ってあげて、自分が思うことやアドバイスできることはして、早く独り立ちしてもらって(中略)それが結果、患者さんのためになったりするのかなと思って。

「役割を担うことで学びを得る」

役割を担うことで、気づきが増え、その責任遂行の先に学びがあると気づくこと。

責任感がちょっと強くなったかなと自分で分かるようになってきたというか、すごく業務の仕事をやって成長したなと思えるようになりました。みんなで話し合っ、改善策を提起してやっていくという仕事を一応任されているので、それは何かやってよかったなと思うし。

「先輩からの教を後輩指導へ活かす」

先輩からの教を振り返り、後輩指導に活かすことで自分の課題に気づくこと。

1～2年目の時は根拠とかそんなに考えずに、ただ自分のできることをやっていた。でも3年目になって、根拠を教える立場にもなったし、その根拠ができていない状態で上にあがっていかなきゃいけないという、焦りじゃないですけど、「根拠をこの自分の中に入れておかなきゃいけない」という思いが生まれました。

「後輩を守る責任」

自分の看護実践の責任のみならず、リーダーとして後輩や他者への目配りも要求されること。

3年目って自分の責任もあるけど、1年生を守ってあげなきゃいけない責任もちょっとあるのかな。

このように3年目看護師は、後輩指導や役割を担うことから視野の広がりを得て、看護実践の問い直しや再認識をしていた。

V. 考察

3年目看護師が語る知の様相は、14の概念カテゴリーで構成された。5つの概念カテゴリーからなる「自分らしい看護の将来像をもつ」、7つの概念カテゴリーからなる「自分なりの倫理的価値観をもつ」を基盤とした知の様相があり、これらの両方に影響を受けた理想の看護実践は共通する2つの概念カテゴリーとして表現された。また、3年目看護師としての立場の変化や役割遂行の4つの概念カテゴリーもこれらの基盤となる知の様相から見いだされた。意味づけられた3年目看護師の知について、先行文献を参照しながら考察する。

3年目看護師は、理想とする看護の像がより鮮明となり、自分らしい看護を目指した明確なビジョンを持って実践する「自分らしい看護の将来像をもつ」ことができていた。経験から学んだ看護の実践の姿が「こうありたい」「こうあるべき」と自分の中で確固たるものとして再認識され、自分の実践に自ら疑問を投げて（「今までやってきたことをもう一度見つめ直す」）、少しでもその目標に近づきたいと改めて努力をしていた（「自分の目標の再認識」）。また、看護実践を通して「自分なりの倫理的価値観をもつ」という明確な価値観も築かれた。「患者とその家族の本当の思いを反映させる関わり」や「もっと善くするためにできることを考える」ためには、十分にできなかったことへの後悔や「形式化したケアの枝を伸ばせていない危機感」のような伸び悩みを感じていた。野嶋（2012）は、看護学の4つの知（経験知、審美知、個人知、倫理知）のパターンの倫理知は、「何を為すべきか」を判断することに焦点をおき、看護師として為すべき行為の基準を思量する知を指している。それはすなわち、何が善で正当か、誰のために行われているのか、責任をもつべき行動はどれかなど、道徳的、倫理的行為の基盤となる知であると解説している。新人看護師、2年目看護師の語りでは、ある状況下で、相手に対して、自分が何をすべきかを判断しそれに基づいて反応・行動する個人知の様相が殆どであった。3年目看護師は中堅看護師への移行期でもあり、基礎的な知識や技術を土台として臨床の中で学習を続け、より高度な看護ケアに発展させていく段階でもある（稲垣・久保・並松、2013）。また、3年目看護師は自己教育力が2年目看護師に比して有意に高い（畔柳・近藤、2013）など、自律して自主的に知識・技術を習得したいとするモチベーションが高まる状況にあると言える。一方で、「形式化したケアの枝を伸ばせていない危機感」のような伸び悩みもあることから、3年目看護師には個人の看護実践の力量差も生じる。真壁・木下・古城（2006）によれば、3年目以降は新たな課題や役割が課せられることにより負担感やストレスを感じ、それが行き詰まり感となるとも指摘されている。本研究の結

果では、思うようには上手くいかないながらも、理想とする看護実践のビジョンにより近づけていくために、「プラスアルファのベストなケア」を模索してケアの正当性と質を高める必要と責任を感じていた。そのため、「冷静に自信をもって自分から意見を発信する」し、「自分なりの根拠をもって発言する責任を負う」と、「躊躇なく相談し考えを擦り合わせる」ことで「チームの中で戦力になる」ための努力と経験を積んでいた。このことから、看護実践に対する関心を見逃さず常に刺激しあえるような環境をつくり、職場の同僚達と日々の実践を話し合い、共に振り返りを行うことによる人間関係づくりの重要性が示唆される。

また、チーム医療の中での役割発揮や後輩指導の役割、委員会活動などの役割は、その責任を果たすために、さらなる看護実践の問いや根拠の見直し、知識と経験の積み重ねに加えた価値観との照合が自己研鑽につながっていることが見いだされた（「指導的な立場から視野が広がる」、「役割を担うことで学びを得る」）。そして、こういった自己研鑽から得られることは、結果として患者への看護実践に活かされることで、さらなる役割発揮のモチベーションにもなっていた。ここでは自分の考えだけに頼ることなく、「先輩からの教えを後輩指導へ活かす」ことから「後輩を守る責任」の重みが語られた。

以上のことから、3年目看護師が語る知の様相は、理想とする看護の像が自分の中で腑に落ちて、明確で具体的な看護実践のビジョンとなり、失敗や後悔といった経験から導かれた本質的な目標ができて、現実的には上手くいくことばかりではないにせよ、より近づくための努力をすることであった。2年目看護師の語りでは、自分の看護とは何かを見つめる転換点であることが明らかとなったが（杉田・西村・唐津・福井、2018）、本研究では自分なりの倫理的価値観と臨床現場で生じている価値観の間で、時に葛藤を覚えながらも、もっと善くするためにできることとして、自分らしい看護実践の模索と問い直しの倫理的な知について語られることが明らかとなった。

VI. 新人看護師から3年目看護師の臨床看護実践の知の様相のまとめ

新人看護師から3年目看護師が語る臨床看護実践における知の様相は、新人看護師が20の概念カテゴリー（杉田・唐津・西村、2018）、2年目看護師11の概念カテゴリー（杉田・西村・唐津・福井、2018）、3年目看護師14の概念カテゴリーの語りから表現された。

新人看護師が語る知の表現では、看護実践の経験を一つひとつ積むたびごとに周囲からの影響を受けながら成長することを自覚する個人知の様相が明らかとなった。2年目看護師は、自己成長や達成感を感じつつ、業務偏重となることによる理想とする看護師像とのギャッ

ブや葛藤を抱えながらも看護実践の経験から新たな意味を見いだしており、そこにはエキスパート看護師の看護実践から学ぶ審美的な知についても語られた。3年目看護師では、自分らしい看護実践の模索と問い直しをする倫理的な知が随所に語られていた。

入職当初は、知識も看護技術も乏しく業務をこなすことに精一杯で、余裕も自信もなく、できればずっと先輩看護師に守られた状態で一人前の責任を負うことから逃げたくもあり、同期と比べて焦り、2年目看護師が遠くに感じられるほどであった。看護実践の経験を積み、患者との関わりから失敗も達成感も得ようになると、もっと善くしたい、もっとこうあるべきと内省を繰り返すことで、成長の実感とさらなる高みを目指す目標が明確となっていた。また、自らが指導的な立場を経験することは、すなわち自己研鑽となり、視野が広がり、原点回帰ができて思慮深さと責任感を抱くこととなり、そのような看護実践の中では、より自分らしさを模索して、理想とする目標に近づく努力が語られていた。これらの知の語りは、業務手順を遂行するだけの行動から意図的な自分の活動へと実践行動の変容がみられた自己成長の一端と捉えられ、目の前のことしか考えられなかった新人看護師が徐々に基礎的な知識が根づいて、より大局を意識するようになり、奥深い実践知を感じはじめ一人前の看護師となる成長過程の様相を示したと結論づけられる。

Ⅶ. 今後の課題と展望

以上の研究成果は、新人看護師が臨床経験を通じて成長するキャリア形成の初期段階の知の獲得の解明となり、キャリア形成支援のガイドとして還元可能である。少子超高齢社会において、看護職の役割が拡大の方向にシフトしつつある。看護職の活躍の場が広がり専門性を高める環境が整ってはきたが、看護職が自律的にキャリアを考え前向きに進めるよう促すキャリア支援体制が十分であるとは言えない。キャリア支援に重要なのは、支援を受ける者が、継続して自己成長を確認しながら自分の将来ビジョンを明確にできることである。今後は、新人看護師から続く中堅看護師における看護実践の知の様相からキャリア形成支援を検討することを課題とする。

謝辞

本研究にご協力頂いた参加者の皆様ならびに所属施設の看護管理者の皆様にご心より感謝申し上げます。なお、本研究は、JSPS科研費25463308の助成を受けて実施し、本研究の一部は、第35回日本看護科学学会学術集会において発表した。

文献

- Carper, B. A. (1978). Fundamental patterns of knowing in nursing. *Adv.Nurs.Sci.*, 1(1), 13-23.
- 稲垣伊津穂, 小久保操, 並松陸世 (2013). 卒後2・3年目看護師—の課題学習から見たこと—フォーカス・グループ・インタビューより—, *日本看護学会論文集*, 43, 227-230.
- 陣田泰子 (2007). 学習する組織を創る「知」の共有—実践知をどう概念化し伝えるか—. *看護展望*, 32 (13), 12-16.
- 川原由佳里 (2013). *看護の知 実践を読み解くための新しい知の考え方*. 看護の科学社, 東京.
- 木下康仁 (2003). *グラウンデッド・セオリー・アプローチの実践*. 弘文堂, 東京.
- 畔柳あゆみ, 近藤暁子 (2013) 卒後1～3年目看護師の自己教育力, 仕事意欲の比較, *日本看護学会論文集 看護管理*, 43, pp.79-82.
- 真壁幸子, 木下香織, 古城幸子 (2006). 職業経験5年以内の看護師の早期離職願望と仕事への行き詰まり感, *新見公立短期大学紀要*, 27, 79-89.
- 野嶋佐由美 (2012). 看護の知の構築に向けての方略, *日本看護科学学会誌*, 32 (2), 72-76.
- 杉田久子, 唐津ふさ, 西村歌織 (2018). 臨床看護実践における看護師の知の様相 —新人看護師の臨床看護実践における知の語り—, *北海道医療大学看護福祉学部学会誌*, 14 (1), 23-29.
- 杉田久子, 西村歌織, 唐津ふさ, 福井純子 (2018). 臨床看護実践における看護師の知の様相 —2年目看護師の臨床看護実践における知の語り—, *北海道医療大学看護福祉学部学会誌*, 14 (1), 31-35.
- Tanner, C.A. (2000). 学習者の個性に応じた看護教育. *日本看護教育学会誌*, 10 (3), 39-49.

受付：2017年11月30日

受理：2018年2月22日